

第5章 帯広の森のこれから

帯広の森づくり40周年記念ティーチ・イン

1. 日時 2014年11月30日(日)
14:00~16:20
2. 場所 ホテル日航ノースランド帯広
2F ノースランドホール
3. 主催 帯広の森40周年記念事業実行委員会



ティーチ・イン ポスター

4. タイムテーブル
14:00~開会
・帯広市長あいさつ
・帯広の森40周年記念事業実行委員会
委員長あいさつ
14:10~情報提供
・帯広の森づくりの概要
・日本自然保護協会の取り組み
講師/高川 晋一氏
14:50~ティーチ・イン
講師や帯広の森に関係するスピーカー、会場
の参加者とともに帯広の森の将来、市民との
関わりなどについて討論。
16:20~閉会

5. ティーチ・イン参加者
・講師 高川晋一(公益財団法人日本自然保護協会)
・進行役 太田道子(FM-JAGA)
・スピーカー 安達康博(帯広市都市建設部
長)、池田亨嘉(エゾリスの会調査幹事)、松
井渉(森の少年隊指導員)、日月伸(帯広の
森・はぐくーむ副施設長)、大熊勳(帯広畜産
大学学生)、澤田聡(森の里小学校教諭)、千
嶋夏子(日本野鳥の会十勝支部事務局)、鈴木
実佳(一般市民)
・アドバイザー 山田英和(帯広の森植樹祭実行
委員会(現在は解散))

6. ティーチ・イン要旨 (太田氏)

それではスピーカーの皆さんをご紹介させていただきます。

まずは、森づくりを進める行政の立場から、帯広市都市建設部長 安達康博様、森づくりを進める市民団体の立場から、エゾリスの会 池田亨嘉様、帯広の森をフィールドに自然に触れる活動をしている立場から、森の少年隊 指導員 松井渉様、帯広の森育成利活用の拠点施設を運営する立場から、帯広の森・はぐくーむ 副施設長 日月伸様、帯広の森の近郊で学ぶ者の立場から、帯広畜産大学 学生 大熊勳様、帯広の森で環境学習を進める立場から、帯広市立森の里小学校 教諭 澤田聡様、帯広市民の立場として、日本野鳥の会十勝支部 千嶋夏子様、同じく、帯広市民の立場として、鈴木実佳様です。

(高川氏)

これから80分間、帯広の森がどのような価値をもたらしているか、今後どのような価値をもたらす森に育み、私達市民一人ひとりがどういう役割を担っていけばいいのか、皆さんと一緒に話していきたいと思えます。

この方々だけでは森づくりはできません。会場の皆さん一人ひとりが主役になっていただくことが大事ですから、皆さんも積極的に議論にご参加ください。

まず壇上の皆さんに、帯広の森は市民にとってどういふ森で、どんな自慢できるところがあるのかご発言いただきます。まず、実際に森の管理に携わっている、池田さんと日月さんお願いします。

(池田氏)

エゾリスの会の池田です。帯広の森での活動は、自分にとって日常になっています。活動日数は年間30日以上ですが、なぜそんなに活動できるのかというと、日常だと思っているからで、特別な事だと思っていられないと思います。

森の様子を見ると、10年程度の差がある森だと、鳥の数が3倍に増えている。自然林だと、さらにその3倍。自然林に近づけていくためには手入れが必要で、年間30日も活動していても、ここもあそこも気になるけど手が回らない、自分の部屋があまり片付いていないような状態だと思っています。

(日月氏)

帯広の森・はぐくーむという施設で働いている日月です。帯広の森は30年間の植樹、15年間の育樹を経て今40年を迎えています。森が育ち、植樹や育樹のほかに新たな森との関わり方が必要ということで作られたのが、はぐくーむです。

はぐくーむに来られる私より上の世代の方々は、ここがかつて畑だったことや、植樹祭で木を植えたことなど、自分が森に関わっていたとお話くださる方が結構いらっしゃいます。ところが若い世代、特に子どもたちにとっては、ここはもともとあった森だというイメージや、運動施設のイメージが非常に強いです。

帯広の森の価値を、もっと市民で共有していくことが、植樹が終わったこれからの期間、重要な気がします。



(高川氏)

帯広の森での活動は日常と言える方が千人増えたら、森は本当に良くなると思います。

澤田さんや松井さんは、教育者の観点から、帯広の森の価値についてお話いただければと思います。

(澤田氏)

森の里小学校教諭の澤田です。森の里小学校は今年で開校24年ですが、開校当時から植樹祭に参加し、植樹祭がなくなった後も、植樹を続けさせていただ

いています。そのほか、育樹活動、森林教室で、森林の中を散策しながら、木の年輪の数え方や、高さや幹の太さの測り方なども学んでいます。

学校自体が帯広の森の一部となっており、ビオトープも作っています。学校の敷地の中にある水生昆虫の観察や、動植物の調査を行うなかで、生態系のまだ「せ」の字かもしれませんが、勉強していく体制をとっています。

(高川氏)

貴重な環境教育の場として機能していると思います。

松井さんは、小学校5年生から森の少年隊で活動し、今、子どもを育てる立場にあること、ご自身が何十年も通して森と関わるなかで、どう変わってきたかをお話いただければと思います。

(松井氏)

森の少年隊という団体で活動している、指導員の松井です。

私の実家は帯広の森から自転車で5分10分程度のところで、小学校5年生で森の少年隊に入る前も、親に連れられて、森でサッカーボールを蹴ったり、虫を拾ったりなど、森に関わりのある人生を歩んできたような気がします。

森の少年隊では、帯広の森をベースに、自然の勉強はもちろんですが、自然に携わる人々など、色々な人間と関わっていくなかで、それぞれの人間形成ができれば良いと思い、様々な活動をしています。

僕たちは、先生でも研究員でもないのですが、教えることは一通りのルールやマナーぐらいですが、それ以外は、自然から教えてもらうことが多いです。子どもたちが植樹や育樹などの体験を行い、大人になって帯広の森を見渡した時に、すごいことをやっているのだなど、改めて実感できると思います。

(高川氏)

森に魅了された方の一人ですね。

大熊さんは学生になってからこちらに来られたということですが、森に行った第一印象や、忙しい学生生活を通じてどんな風に森と関わられているのか教えてください。

(大熊氏)

帯広畜産大学の学生の大熊です。帯広に来て6年目になります。僕は野生動物の研究室に入っており、どちらかというと生き物に興味のある人間ですが、帯広の森の第一印象は「分厚い」でした。僕は奈良県の山沿いの町出身で、すぐそこに山や森があっ

て、探検したり、虫をとって遊んでいました。

なぜ分厚いと良いのかというと、他の林を歩くよりも、たくさんの生き物を見るチャンスに恵まれるからです。生き物に限らず、変な形の木の幹とか、森には面白いものがいっぱいあって、分厚い森だと、面白いものを見つける機会も増えると思います。

そういう森が帯広の市街地の中にあることがすごく恵まれていると思います。

(高川氏)

生き物好きの子ども、学生にとっても、魅力的で仕方がない森だと思います。

一方で、帯広の森は都市公園、総合公園でもあり、色々な方の利用があると思います。鈴木さんは一般の市民の方の代弁をしてくれると思うのですが、日々の生活の中で、どのように森を見ていますか。

(鈴木氏)

私は生活の中で、例えばこの道路は走りやすいとか、この施設は古くなったとか、目に見えることばかりを意識しており、毎日帯広の森のことを考えている訳ではありません。

でも、そんな私でも、ぼっかりできた時間や、ちょっと一人になりたい時は、JICAや、森の交流館・十勝で、ひとり手紙を書くなど利用させていただいています。森がもつ静けさや、森が放つエネルギーに触れたいとどこかで感じているので、足が向くのかなと思います。

人が手をかけてもらって大人になるように、植樹や育樹の時代を経て、帯広の森は、すっかり大人になっていると感じます。私達も大人として、今この帯広の森と向き合うことは、すごく意義があると思います。

(高川氏)

一般の方々にそのくらい思っただけのなら、大事な財産だと思います。

これからの世代がカギになると思いますが、千嶋さんは、女性、子育て世代の立場として、森に対する価値をどう考えられていますか。

(千嶋氏)

子ども同士で遊ばせたくても、近所の公園には子どもがいなくて、親と一緒に遊ぶだけ。公園以外は、子どもを遊ばせる場所が本当になんかありません。森に行くと、木に登らせたり、川で遊ばせたいのですが、私自身森で遊んだ経験がなくて、どう遊ばせたら良いかわからないのです。子どもを森で野放しにできる、何か仕組みがあったら良いなと思います。

また、私は野鳥の会にも所属していて、畜大に来て、学校内の野鳥の多さにびっくりしました。帯広の森も、関わる機会があるならぜひ関わっていきなさいと思います。

(高川氏)

様々な形で市民との接点が生まれていますね。

主題を変えて、40年という長い歴史の中で、計画に基づき森づくりを行ってきた一方で、少子高齢化が進み、コンパクトシティ化が進み、環境に対する意識が高まり、危機的状況が続いて生物多様性を守らなければならないなど、色々な社会情勢の変化があると思います。

帯広の森は、今でこそ様々な恵みがあると思いますが、今後、こんな恵みを与え、こんな価値のある場になるのではないかと、ということぜひ、会場の皆さんも交えて議論していきます。

まずは市の方から実際に森づくりを進めてきた立場から、40年という長さをどう捉えているのか、色々な目的を持った公園ですが、森の可能性や価値を、今後どういう形で活かしていきたいかをお話いただければと思います。

(安達氏)

帯広市役所都市建設部長の安達です。私は技術屋でございまして、帯広の森の造成にもわずかですが関わっておりました。私も森へ行くと、犬を連れた散歩の方や、森の中を自転車で通る方、スポーツ施設や樹木などを見ながら、帯広の森40年、事業認可がおりてから41年、こんなに長い事業認可をとっている公園はないと感じております。

昭和50年頃の帯広の人口は14万2千人程度で、その後毎年2千人位ずつ増えていきましたが、今でいうニュータウンというものは昭和50年当時はありませんでしたので、都市計画は市街地を抑制する、バッファー的な役割も果たしてきたのかなと思います。よく言われるのが、都市部と農村部の区分で、緩衝地帯とも言われる、そんな役割を果たしてきたと思います。

ソフト面だと、昭和50年からの30年間、平成17年まで市民協働で植樹や育樹を行ってきました。いまでも市民協働は何の変哲もない言葉ですが、帯広の場合は帯広の森づくりを通じて、市民協働ができたのだと思います。植樹祭や育樹祭などが終わった後も、引き続き市民団体の方々が色々森に関わってくださっていることが非常に大きな成果だし、これからは行政としてもがんばっていきなさいと思います。

(高川氏)

素晴らしい取り組みだと思いますが控えめですね。もっと自慢しても良いと思います。その点、池田さんは、もっと自慢したいと思っているのではないですか。

(池田氏)

帯広の森は世界的に価値のある事業ですから、世界から優秀な人を引っ張ってきて一緒に活動できたら、我々は楽しいですよ。アピールのネタは揃えているつもりですので、活用してほしいです。帯広で森づくりの国際会議のようなものを開催し、それとともにまちづくりを一步步行うことで、文化の高い地域になっていくことを妄想しています。

(高川氏)

本当にそうなれば良いですよ。価値をあらゆる側面から発信していくことこそ、この森が財産として守られる素地を作ると思います。

澤田先生にお伺いしますが、教育の場としてこうなって欲しいといった要望はありますか。

(澤田氏)

森の里小学校は、帯広の森の一部にあり、子どもたちは常に体験学習ができますが、それ以外の小学校は、自然は近くにあっても、体系的に学んでいる学校はほとんどありません。

森の里は、総合的な学習70時間のうち、環境教育に40時間使っていますが、他の学校では難しい。環境以外にも、国際理解、福祉、情報など、様々な分野の中で、各学校が独自性をもって行わなければならない。

森の里は開校以来、この素晴らしい環境を活かしていますが、私が違う学校に異動になった時、帯広の森をどのように発信できるか考えていきたいです。

(高川氏)

はぐく一むは森や人をつくるための拠点として設けられたので、色々な教育の機能があるかと思いますが、子どもたちに対して今後の展望をどういう風に描かれていますか。

(池田氏)

僕の仕事(帯広百年記念館学芸員)の仕事の話になりますが、今後のはぐく一むと協力しながら行っていきたいです。

森の里小学校では、3年生で大人と張り合う位にアリの詳しいですが、それはちょっとしたアイテム

と言葉かけ次第で、例えば森の中で実生の見分け方など、森づくりに繋がるアイテムを用意し、それを発展していくプログラムを作る。それを森づくり体験の第1歩として、また次の段階を考え、作っていきたいと思います。

(日月氏)

はぐく一むは昨年度、小学校、保育所、幼稚園など学校関係団体だけで33団体、2,000名以上の子どもたちが来ています。ただ、帯広市全体の割合でいうと今年度では市内小学校26校中8校程度で、3分の1にも満たないです。はぐく一むに来ることが森を体験する全てではないですが、まだまだ広がりには足りないと思います。

私達も体験プログラムを色々考えていますが、ただ楽しいだけではなく、森を少しでも身近に感じてもらえる工夫をしています。森を好きになってもらうことがその次に繋がると思いますので、子どもたちに対してはそう意識して接しています。

(高川氏)

色々な形で市民と接点を作っていくことが大事ですね。森を育てることも大事ですが、それとは全然違う視点、もっと色々な観点での接点の作り方があるかと思います。

森づくりから一番遠い鈴木さんは、市民として、もっとこんな形で、帯広の森との接点が作れるといったアイデアはありますか。

(鈴木氏)

森には若い人がすごく少ないですね。若者で帯広の森の意義を、日常的に感じている人は少ないと思います。若者達が近づいてくれるようなことをプロが緻密に考えて、でも大人はそしらぬ顔で誘導していくことが大事だと思います。

もし私が若い時でしたら、女子友と一緒にいける、上手に自然と文化が交わるようなカフェがあれば良いと思います。帯広や周辺にも、恋人と遊びに行く場所が少ないと思います。少しお洒落感があって、格好良い街、でもそこには自然がある。

教育ももちろん大事ですが、もっと大人の知的好奇心を満たすような遊びの部分が帯広の森で展開されると、お母さんが小さい子どもを連れても行けるので、すごく良い。今のお母さんは気持ちが若いので、いつも教育のことばかり考えているわけではないと思います。

(高川氏)

確かに若い人があまりいないですね。ここにきて

くれている方々の平均年齢を下げたい場合は、イメージ戦略というか、同世代から同世代へ発信することが大事だと思います。帯広の森には可能性や、もっと自慢できる何かがある。自分の街にこんな森があると発信していく。

大熊さんは、友人をこの場に巻き込むためにはどんな帯広の森との接点を作ったら良いと思いますか。

(大熊氏)

例えば鳥を見に行く時に後輩を連れて行きたいです。帯広の森の魅力は生き物以外にもありますので、生き物以外でも学生を囁ませていけば、接点を作れると思います。

もっと畜大の中にも、帯広の森でどんなレクリエーションや遊びができるのかなど、帯広の森を知っている人が必要だと思います。帯広の森と深く関わるような部活やサークルを作っていけばもっと流れを強くできると思います。

(高川氏)

千嶋さんは、さっき、子どもを連れて行くには入り方がわからないと話していましたが、どういふサポートがあったら良いですか。

(千嶋氏)

子どもは急に熱を出すので、いつでも参加できて、いつでもここに行けば子どもたちが遊んでいるというような場所がほしいです。今日はこの場所で間伐など森の作業をしているとお知らせが来て、いつでも誰でも来て良いですよという感じだと来やすいです。イベントはあるのですが小学生以上、早くても5歳以上が多いので、0歳児でも連れて行けたら行きやすいですね。

子どもには、保育園だけではなく、いろんな世代の人と関係性を持ってほしいと思います。子ども一人だと木登りしないけど、木登りしているお兄ちゃんがいたら絶対真似すると思う。

私、野鳥の会という立場もありますので、帯広の森のどこにどんな鳥がいるか、子どもたちと調べてみたいと思います。

(高川氏)

ここで会場の皆様にお伺いします。

帯広の森に行ったことがある方、手をあげてください。さすがに全員ですね。無い方、これに手をあげる勇気はないですね。

壇上に並んでいる方々は、主に自然環境教育や保全管理が中心だと思いますが、それ以外の接点で、

帯広の森を訪れて、こんなふうに帯広の森が変われば、もっともっと色々な方が訪れるような場所になるといったアイデアや、自分自身の経験などがあつたら、手をあげてください。



(参加者A)

面白いお話をありがとうございます。ただ、皆さんは現在のこの瞬間の森を見ていますが、森は生き物です。未来にどのように輝いていくかが重要です。

これは、明治神宮の造成についての本ですが、私はこの本を参考にしながら、いつも帯広の森を見ています。植樹祭から育樹祭、あらゆる行事にほとんど参加しました。明治神宮の森は大正5年に明治神宮が造られた時に境内林を造るという計画で始まり、それから100年経ち、人工林から自然林に造りあげた。

帯広の森も40年前、吉村市長、田本市長の時代から、色々な形で市民の協力と行政の行動によって森ができてきたわけですが、少しマンネリズムに入ったところもあるかと思っています。これから100年に向けて、あと60年あります。どういう姿の森に導いていくか、特に行政は避けて通れない問題だと思いますので、ぜひそういう面でご討論いただけたらと思います。

(高川氏)

実は帯広の森には、造成当初に造られた素晴らしい計画書があります。安達さんからご紹介をお願いします。

(安達氏)

帯広の森造成計画は、帯広の森の造成にあたり昭和50年に作られたもので、林相などの調査内容、整備の計画など、帯広の森の方向性などが書いてある最初の計画です。市ではその後も今の計画をベースに、利活用計画や十勝飛行場周辺の森づくり計画などを作成し、今日に至っている次第です。

(高川氏)

私も計画書を見て、明治神宮に通ずる、あるいは

匹敵すると、すごく感動しました。今日この場で、生物多様性の管理目標などについて議論するのはマニアックすぎるので、深い議論は避けたいと思います。会場にも学芸員の方や、帯広畜産大学の先生もいらっしゃるので、ご専門の立場から、目指すべき本当の像を少しご紹介いただけますか。

(池田氏)

先ほどのDVDでブロック別造成計画が紹介されていましたが、現在は当初の案の考え方を踏襲し、ここは原生的自然の状態に戻しておく場所、ここは少し人手を入れ続ける森、そして人間の利用が多い散開林の3種類に区分する論議が終わったところで

す。帯広の森は1年ずつバラバラの場所に樹木を植えているので、性質の違った林がパッチ状にある。これに対して、長い時間をかけて森をこういう方向へ導いていこうという共通認識を、森づくり活動団体の中で共有しているところです。

バラバラに1年ずつ植えているので、今一番年をとっている林が40年になる。植樹した林は順次40年に突入していくので、作業を行うマンパワーが順次増大していく。ぱっと見積もると、年間実働200人位の人間がいなければならない。延べ人数だと少なくとも2,000人、多くて5,000人の人間が森に関わっていかなくては、10年後は手に負えない状態になってしまう。

市民団体をただ受け入れるだけではなく、どういう風に森づくりを行えばきちんとした森になるか、市民団体や森に関わる人々に向けた指針や仕組みを作ったところです。

(高川氏)

本日は帯広畜産大学の紺野先生もいらっしゃっていますね。よろしければ少し補足いただけますか。



(紺野氏)

帯広畜産大学の紺野です。帯広の森は当初の計画では、植えやすい木を植えていく方針でしたが、最初の頃は針葉樹ばかりを植えていました。それがだんだん安定し、完成されてくると、当初の目標にあっ

たふるさとの森を造っていこうと、植樹の仕方が少しずつ変わってきました。

今の森の管理方法も、ふるさとの森をどのように作っていくかを考えています。スポーツ施設の配置など、最初の計画から色々狂いは生じましたが、基本的には当初の計画に戻ろうというように動いているのだと理解しています。

(高川氏)

私も帯広の森を5年程見て、森として未熟な点ももちろんありますが、一方で、斜面林など生物多様性豊かな場所が残っており、死守しなくてはならない財産だと思っています。

これは私の個人的な見解ですが、かなりの部分を時間が解決してくれると思っています。

今、哺乳類や鳥の調査を行っていますが、とにかく実を運んでくれる動植物がたくさん記録されます。実際、リスなどが種を運んで、計画や、植栽した時とは全然違う、良い方向へ森が戻っている場所もかなりあります。当時の造成計画は、こういうバックグラウンドがあるからこういう植生を目指しますなど、かなり事細でしっかりとしたものとなっていますので、私はそれがあれば豊かな森が戻ってくると思います。

結局はそれを手助けしてくれる、成し遂げてくれる人と動植物を取り戻すことが重要で、今日のこの場はむしろ人を育てる、育むということも焦点の一つかと思っています。

40年ずっとこの運動を引っ張ってくれた山田さんは、これまでの40年間を振り返って、今後森をどうもっていくべきかお考えを少し聞かせていただけますか。

(山田氏)

私はまず帯広の森が造られた歴史を押さえる必要があると思います。132年前、明治16年に依田勉三が入ってくる以前は、この十勝10,800km²の中に、幕末に一橋藩が調査したところ750戸の先住民族の方が自然の中に住んでいた。750戸だと多めに見て4,000人です。

そして、十勝平野は昔火山灰でしたが、それから一次疎林、二次疎林の歴史があり、明治16年から開拓が始まって、現在の豊かな畑があるわけです。

我々は当初の段階で吉村市長と話をしたわけではないですが、決して太古の昔の十勝を作ろうという意識はありませんでした。この計画が始まった昭和40年代は、都市公害が日本全国非常に多い時代でした。また、核家族化で、街のスプロール化、街がどんどん伸びていくという懸念もありました。これは

日本でも世界でも特異な例として爆発的な市街化が進んでいた時期ですから、今でいうコンパクトシティとは少し発想が違いますが、一定程度の範囲の中に、きちんとした街をつくっていかうという気持ちが大きかったのだらうと思います。帯広の森は、今でこそ406.5haの計画決定をしていますけど、当初は、十勝川、札内川に続いて、街の城壁としての森を作ろうという意思がありました。

帯広の森は一体何で、どうあるべきかを考えると、まだまだ色々な人が色々な形で活動しても、帯広の森の懐は非常に大きいと感じます。四季折々、帯広の森が持っている懐の大きさは、様々なフィールドを提供してくれる。ただし、一定程度のルール作りは必要だと思います。

それと、市街化区域が繋がってきているので、山火事などに関する何らかの対応も必要だと思います。はぐく一むの前の芝生には、時々0歳児1歳児の子どもたちも遊んでいるので、あの辺りに車を寄せられる場所があると良いと思います。僕は400haを皆で使うのは無理だと思うので、ポイントを押さえながら、色々な形で森づくりを進めていけたら良いと考えます。

(高川氏)

多種多様なニーズや、懐の広さがあり、ゾーニングができて、様々な用途で使える広さは帯広の森の利点のひとつだと思います。

100年の計で、先人が行ってきたことを、そのまま奴隷的に引き継ぐのではなく、その時代の担い手が、温故知新しながら、次の時代を見据えて、楽しみながら行っていくことが大事だと思います。そのうえで核になる重要なところは残しつつ、そういった考えを理解できる中核の方々を育てつつ、でも入口、間口は広く、色々な接点を設けて誰もが入りやすくしなければならぬと、かなり矛盾したことをクリアしていくためには、多種多様な協力や、チームワークが必要だと思います。

まだ、確とした帯広の森の将来像は見えていないと思うのですが、そのうえで、自分達はこのように貢献していける、あるいはそういう将来像を実現するために、この方々にこういうふうにならば嬉しいなどの期待を語っていただければと思います。

(池田氏)

先程少なくとも年間延べ2,000人、多くて延べ5,000人、森の手入れに入る必要があると話しました。帯広の森の植樹祭に参加しているのが約5,000人前後で、植樹祭は1日で5,000人入りますが、森づくり活動は1年間で森の各地にバラバラの日程で入りま

す。

これは非日常の帯広の森から日常になっていくプロセスで、森の手入れを行う人へのルール作りが必要です。エゾリスの会も力を貸せると思いますが、市民団体だけがルールを作るわけには絶対にいきませんから、行政と肩組んで行っていきたいです。僕らのように、伐採から何から全部フルセットで網羅するだけが森づくりではなくて、ちょっと鳥を見て、恩返しに外来種だけ抜いて帰るといったことも森づくりに位置づけて行うこともできると思います。

僕も行政の人間ですが、そういった様々なことを市民に対してアナウンスできるような体制づくりなど、必ず行政が一步前に進んでいただく働きを期待しています。

(高川氏)

次に日月さん、はぐく一むという市の施設の指定管理者ですが、ご自身の施設で貢献したいことや、施設だけではクリアできない点、どういう主体にこんな期待を持っているなど意見はありますか。

(日月氏)

今日のお話の中で、改めて帯広の森の価値、魅力は何かと考えると、1つは空間だと思いました。森が分厚いというお話がありましたが、そこに生き物が住み、人々が触れ合う森の豊かさが魅力だと思います。

それからもう1つは時間。この森は40年という時間がなければここまで育たなかった。だけどこれで完成形ではないし、100年たっても完成ではない。これからはずっと続いていく時間がひとつの魅力です。

あと1つは人間。人が関わって森を育ててきた。今後も人が関わってどういう森ができるのかわからない。人の関わり方によっては将来の姿が変わっていく。

決して完成されたものではなく、空間、時間、人間が織り成して、いつまでたってもおそらく未完成だけれども続いていく。そういうことが帯広の森の価値だと思います。

今後、帯広の森の将来像をどう描くか、森づくりが間違いなくひとつの大きな柱、大きな車輪になると思います。しかし100年後、計画どおり豊かな森ができたけど、100年後の人々がそれに価値を感じなければ、森はあつという間になくなってしまいかもしれない。その時々で森を守るのは、森を愛する人達や、慈しむ人達がたくさんいる、ある種の森の文化。森を造るということと、もうひとつの柱として森の文化をつくっていくことが大事だと思いま

す。

はぐく一むの役割は、帯広の森の育成管理、利活用の拠点ということで、利活用という言葉を自分なりに解釈していくと、人間の都合の良いように使うということではなく、人と森とのつながり、文化をつくっていくことなのではないかと思っています。そのため森と人との接点づくりが重要だと考えています。森づくり作業がしたいコアな人達との接点をつくることも大切ですし、0歳のこどもを連れてきたり、デートをしたり、色々な人達が関われる森、そういう様々な接点を作っていくのが、はぐく一むの一つの大きな役割と感じています。

先程千嶋さんがプログラムや行事ではなく、普段から関わられるような関わり方をしていただけたらというお話がありましたが、帯広の人十勝の人が、様々な形で触れ合えるような機会や、場面を作っていくことをがんばっていきたくて今日のお話の中で思いました。



(高川氏)

文化をつくるとは、習慣をつくることに近いと思います。行けばそこに何かあるという場を作る上で、はぐく一むはすごく大事な拠点になると思います。

松井さんに、森で週末に森の探検隊で遊ぶことが習慣になるにはどういうことが必要だと思いますか。どういう方の力を借りたいですか、今後行ってみたいこと等ありましたら教えてください。

(松井氏)

習慣になるような具体的行動ですが、難しい問題だと思います。ただ、何かを行うにあたり興味を持つことは重要だと思います。帯広の森を良くしていきたい人は、少なからず帯広の森の中に何かしらの興味があり、付き合っていくうちに気付いたら育成に携わっている、そして、今後の森について何らかの考えを持っている人だと思います。

僕もその一人ですが、帯広の森に入った時に「ここに木を植えたなあ」と興味を持つ人間を増やしていく必要があると思うので、私たちが行っている活動を通じて、小学校5、6年生の子どもたちが森に何

らかの興味を持ってくれば良いと思います。

森に興味を持つ人間を増やす方法は様々で、一つは私達のような活動団体を利用することだと思います。きっかけを色々なところに散りばめておいて、様々な角度から参加できるような状況にすると良い。

また、帯広の森を良くしたいと考えているが、どうしたら良いかわからない人が結構いると思います。

はぐく一むのイベントには木を伐る等の作業を含んだものもあり、はぐく一むは情報発信もしていますが、知らない人も多いと思います。体験しないと楽しいかどうか分からないと思うので、情報を簡単に拾える環境が必要です。

以前であれば、植樹祭や育樹祭といった大きなイベントを経て、今ここにいる人々は、帯広の森に興味を持っていると思います。

大きなイベントを作ることは難しいかもしれませんが、不特定多数の人間がアクセスできるようなイベントがあると、また違うのではないかと思います。

(高川氏)

澤田先生、帯広の教育の中で帯広の森がもっと位置付けられれば良いと思いますが、こういうことを実現したい、ここの助けが必要ということがあればぜひお願いします。

(澤田氏)

現在の市長はフードバレーを掲げて市政を行っています。それ以前に帯広市教育委員会は、帯広市の小中学校の全教科にわたって「食」についてのカリキュラムを作成しており、未だにそれが生きています。そういうことが可能なのです。

帯広市がぜひ小中学校で帯広の森に関わる取り組みをしてほしいということ、教育委員会を含めて行っていくことで、帯広の独自性があるカリキュラムの作成は可能だと思います。一個人が教育委員会に提案してもおそらく難しいので、帯広の森に対する市民の声が大きくなってきて、提案していければ良いと思います。

森の里小学校の5、6年生は、いままでの二十数年の中で約1,200名の卒業生がおりますが、植育樹等の経験は小学校で終わっている人がほとんどです。今後育樹活動に興味を持ってくれる子どもたちをどのように育てていけばよいのかも含め、考えていかなければならないと思います。

(高川氏)

やはり色々な仕組みを色々なチャンネルに入れて

いくことが大事だと思いますが、千嶋さん、そういう点で期待することがあればご発言ください。

(千嶋氏)

私は母親ですが、野鳥の会にも所属しております。

野鳥の会の他にも色々な市民団体が帯広、十勝にはあります。小中学校は市民団体をどんどん活用して良いと思います。私は、地域の野鳥を調べる活動等、野鳥の会でできることは宣伝し、依頼があれば出ていきたいと思っています。

私は池田町に住んでいますが、池田にも素敵な森があります。私の子どもが小学校に入学したら、先程申し上げた提案を行ってみようと思います。

帯広をモデルとして、小中学校で市民団体を活用した授業ができるようになれば良いと思います。

(高川氏)

一箇所でもモデルができると波及するので、まずは良い事例を作ると今後の発展に繋がると思います。

大熊さん、学生としてもっとできること、こういうところからサポートが欲しいということがあれば教えてください。

(大熊氏)

帯広畜産大学にも帯広の森に関心を持っている学生はいます。その大半はバードウォッチングの競技、「バードソン」を行う人です。「バードソン」とは、鳥を沢山見ると点数が得られ、その点数を競い合うというもので、そのために帯広の森に足を運ぶ方がおり、そういう人たちは帯広の森がもたらす恩恵を理解していると思います。

しかし、それ以外の人で帯広の森に何があるのか具体的なイメージを持っている人は少ないと思うので、帯広畜産大学の学生に帯広の森の良いところや、どういった楽しみがあるのかを伝える機会があれば良いと思います。

私自身ができることは後輩を帯広の森に連れて行くことだと思い、行動しています。それ以外では、市民活動団体に帯広畜産大学の学生を弟子にしてもらえれば良いと思います。彼らは貧乏ですが、力があります。ご飯を与えて頂ければ働きます。市民活動団体の方々には、ぜひ弟子をとる様なイメージで若い力を使ってほしいと思います。

(高川氏)

帯広畜産大学でイベントの周知ができれば良いと思います。また、学生にとってはどう将来のキャリアアップに繋げていくかも大事ですので、そういう

ことを見せていければ学生がもっと集まると思います。

最後に、鈴木さん、また一般の方の視点として率直に大事だと思われることを教えてください。

(鈴木氏)

本日皆様とティーチ・インに参加させていただいて、帯広の森にこれだけ多くの方が関わり、長い歴史があり、人の思いがあって森が育ってきているなど、改めて素晴らしいものを私たちは街に持っているなど感じました。ただ残念なのは、それを教えてくれる人はいつも外からの目線ということです。高川先生をはじめ、壇上の皆様の中にも奈良や京都出身の方がいらっしゃいますが、他所の地域の方から教えられることが多いと思います。

私が1番最初に森に誘っていただいたのは、抗がん剤治療をしている時期でした。当時は細胞が死んでいくのを自分の体で感じていて、本当に辛い時でした。今日会場にも来ていただいている一般の市民の方が森に普段から関わっていて、育樹をした際に出る間伐材を利用し、クリスマスリースを作るといって帯広の森に行きました。クリスマスの時期なので大変寒く、駐車場への帰り道、長靴が重く身体が辛かったです。

しかし、森のスペシャリストではなく、普通の会社員の方やお母様達が、はぐくむで森に関わって森をすごく愛していること、森の知識を惜しみもなく私に教えてくれること、そして、私のような者に少し森の恵みをおすそ分けして下さったこと、その気持ちと森が持つ生命の息吹みたいなもので本当に元気になって、帰ってまた頑張ってみようかなという気持ちになりました。

私が経験した森に関する感激した思いを医療関係の方々へ伝え、森に患者さんを案内する時間を設けることや、帯広の森の情報を明確にして、まずは知ってもらうことが大事だと思いました。良いものなのに知られていないことが大変残念です。

正しく森を見つめる人、人を育てられる人、外に発信していく人、これらはまず知れば、絶対皆何かできるものです。皆さんは新しく森を見つめる人、人を育てるスペシャリストなので、私個人としては外に発信していく人にはなれるかなと思いました。

先日スカイタワーで、全国のご当地キティを見ましたが、北海道は函館イカキティ、札幌スキーキティ、帯広じゃがいもキティの3つがありました。帯広は農業などで徐々に認められていますが、森はまだまだですので、いつかエゾリスキティが来る日を望んでいます。

(高川氏)

森の恵みは多様なので、落としどころは沢山あった方が良いと思います。そのためには自然環境に詳しい方々だけではなく、森の恵みに携わる方がそれなりに解釈して、日常に落とし込んでいくことが大事です。

(参加者B)

森と文化を考える際、人の暮らしが密接に繋がっていると思います。私は、3年前に先天性の発達障害だとわかり、障がい者となって、日々の暮らしに問題を抱えている方々が沢山地域に暮らしていることが見えてきました。

私は登別市に生まれ、森、山、川が身近にある環境で幼少期を過ごしており、森の豊かさや生物多様性の大切さについては十分に身を持って感じております。ただ、暮らしの中で様々な問題を抱えている目には見えない方々がいるのは事実で、生物多様性は勿論大切ですが、人にも多様性があること、色々な方々が同じ地域で暮らしていると理解することが大切だと思います。

将来を見据えた森の価値の一つの可能性として、地域で暮らす人の心の豊かさを満たせるような森、様々な問題を抱えている人の心の穴を埋めることができるような森の繋がりを持つことができるかと思えます。短い期間でしたが、一度帯広の森のエリアをお借りして、ニート、引きこもり、不登校の経験をされた方々と森の中で一緒に過ごし、社会の繋がりが無い中で森の中で繋がりを持つという空間づくりを行いました。

ドイツで森と人の暮らしについて勉強されてきた精神科医の先生を呼んでセミナーを開こうと思っており、森と暮らし、文化について考えるきっかけづくりになれば良いと思います。市民の方々が様々な問題を持っていることを理解し、それが森によって解決できるようになると森の価値が広がると思えます。

(高川氏)

色々な団体が色々な形で繋がり、それを市がサポートすることが重要だと思います。それでは最後にもう一方お願いします。

(参加者C)

帯広の森40年ですが、100年の大計で考えると、あと60年あります。この森づくりで色々な人の力や行動や関わりが必要です。森を造っていくにあたり、帯広の森の原点を知り、これから先の帯広の森の姿を具体的に描き、その方法を考えていかなければならないと思います。

帯広の森40周年の節目に、これからの森を造っていくための共通の約束事、受け継いでいくべき道筋や指針を、行政や実際に帯広の森で活動されている方々により、策定していると聞いております。地道な取り組みですが、帯広の森を育成していく上で重要なカギとなりますので、ぜひ行政の方がアピールしてほしいと思います。

40年間帯広の森づくりが続いてきたことは、帯広の森に関わっている人だけではなく、普段森とは縁の遠い方の陰ながらの理解と協力があってこそ40年間まちづくりが成り立ってきたのだと思います。

それを今後も続けていくのであれば、色々な方の協力が必要ですし、リーダーシップを発揮していた吉村市長をはじめ、歴代の市長が牽引役となっていくべきです。今までは、帯広のまちづくりの1つは帯広の森づくりであると鮮明に打ち出しているリーダーシップがあったからこそ40年間引っ張って来られたのだと思います。



(安達氏)

市民団体の方が森に関わり、作業していただき本当に感謝しております。行政としても、例えば、帯広の森を巡るバスツアーのような行事を開催し、少しでも森を理解してもらおうと努力しております。

今後も森に関わっていく人を育てていくということを含めて行政もやらなければならないと思えます。将来的な森をしっかりと造っていくのは当然のことです。行政、市民団体の方を含め、次のステージに行くために新たにどういった手入れが必要かも議論しておりますし、それらを情報としてまとめ、発信していきたいと思えます。

(高川氏)

最後まで控えめなので、私はもう少し自慢してほしいです。これだけの人の手でここまで造られた、つまり主役が沢山いて、百年と言う計がしっかりあって、あとは発信していける人と玉があれば、帯広の森は全国的なモデルになりうると思えます。今日ご登壇いただいた方だけではなく、今日ご来場いただいている一人一人が明日から主役となって色々

な立場から活動していただけたら良いと思います。それでは、ティーチ・インを締めさせていただきます。本日はありがとうございました。



(太田氏)

高川先生、スピーカーの皆様、ありがとうございました。それでは、参加者の皆様の熱いご要望にお応えいただきまして、最後まで熱心にご拝聴いただきました、米沢則寿帯広市長に、今日のティーチ・インについてご意見、ご感想をいただきたいと思ひます。



(米沢市長)

今日は長時間大変中身の濃い、大変参考になる話をたくさん伺わせていただきました。今日ご参加の皆さんも長時間本当にありがとうございました。

まず、最初にスライドを見て改めて感じたことについてお話しします。私は、帯広で生まれ帯広で育ち、帯広を離れたのが昭和49年の3月でした。吉村市長が昭和48年の議会で頑張って通して頂いたこの帯広の森のことは、当時私は高校生だったので、ほとんど記憶にありませんでした。4年前の選挙で帯広に戻る直前に、帯広市のホームページを見て、帯広の森の大半のことを初めて知りましたが、プライドというか、帯広市に生まれて良かったなというか、帯広ってすごいところなのだと思ったことを今も鮮明に覚えております。誇りというのでしょうか。このような街の市長をやってみたいなとその時思いました。それで帯広に戻ってきて、4年と少し経ったところでありませう。

私は海外の生活が長かったので、オーストリアの

ウィーンの森も見ました。海外ではドイツでの仕事がかかったのですが、1番印象的だったのは、ドイツのミュンヘンに飛行機で行くと、ブラックフォレストという黒い森が広がっていて、そこに飛行機で降りていく時の美しさです。そしてあまり入ってはいけないところなのですが、ブローニュの森へも何度か遊びに行きました。そして6年間住んでいたイギリスでは、ハムステッドヒースの近郊に住んでいました。ここは、ヒースの素晴らしい森で、そんな中で生きてきた自分にとって、帯広の森を持っているまちというのは、本当に素晴らしいと思っております。

私の思いを長くお話をさせていただきましたが、帯広の森はこの40年間、ちょうど私が帯広にいなかった期間に造られた森です。ぜひここからの帯広の森に深く関与していきたいと思っております。先ほどから文化というお話もいただいておりますが、堅く言うと文化とはその国民であったり、市民の想像力だというような言葉があります。このような森を持っている人たちはいないと思ひます。先ほど色々大きな森をあげましたが、街を森で囲んでいる地域はまずないと思ひます。つまり、これは誰もやったことがないことなのです。

やっとここまで森はできましたが、この森をどう活かしていくのか、そして、森があるこのまちにどんな文化を作り上げていくのかは、これからだと感じておりました。ぜひ皆さんと一緒に、世界中どこにもない帯広の生き方、帯広のライフスタイルを発信していきたいですし、発信するためには、我々が汗をかきながら、皆さんと色々なお話しをしながらやっていきたいと思ひます。

日本人は大人の遊びが下手なのですよね。子どもだけではなく大人も遊べる、大人が楽しめるまちづくり。それが帯広の森、そして、帯広の広大な畑。

この間教えてもらった言葉です。料理研究家の辰巳芳子先生が私に言いました。「帯広って素敵なところよね。ここは生命の再生の場所だ。麦畑の真ん中に立ってご覧なさい、地平線を見てご覧なさい、日高山脈見てご覧なさい、そして帯広の森ですよ。帯広の森も見てご覧なさい。」

きっとここは生命の再生の場所になれるのではないかなと思ひながら、ぜひこれから帯広のまちづくりも帯広の森も、皆さんと一緒に考えながら進めていきたいと思ひます。

ぜひこれからも皆さんのご協力をお願い申しあげまして、終わらせていただきたいと思ひます。今日はどうもありがとうございました。

(特別寄稿) 十勝の大地に花開く100年の森づくり 北海道文教大学 人間科学部 こども発達学科 鈴木貢

1. はじめに (帯広の森との出会い)

北海道におけるまちづくりの研究を開始したが、1995年頃である。当初は北海道全域にわたって調査を行った。その調査を継続して行く中で、フィールドが二箇所に絞られていった。それは、帯広の森と霧多布湿原である。二箇所に絞られていった経緯は、人との繋がりである。

帯広の森に関していえば、三日市則昭(帯広市建築指導課【当時】)さんと出会うことがなければ、これほど長く帯広の森に関わりあうことはなかったものと考えられる。三日市さんを紹介してくれたのは、当時北海道大学工学部建築学科教授の小林英嗣先生である。その意味で、小林先生と三日市さんは二人の恩人である。

今更ながら、人との繋がりが重要であることが再認識できる。そして、それはまちづくりに繋がるものである。

2. 持続可能なまちづくりと社会的共有資本

(1) 持続可能なまちづくり

持続可能なまちづくりとは、「地域社会の人々が、地域資源を生かしながら伝統的に形成されてきた環境を損なうことなく、将来に向けてまちの進路を選択する継続的な活動」である。ここでは、持続可能なまちづくりについて、三つのプロセス(①初動期のまちづくり、②実践期のまちづくり、③発展期のまちづくり)を経て形成されるものと考えられる。

- 1) 初動期のまちづくり(まちづくりに取組む人々が集まり、目標が共有されていく時期)
- 2) 実践期のまちづくり(異種・異質の組織が、共通の社会的目的(まちづくり)のために協力して働き、協働型まちづくりが形成される)
- 3) 発展期のまちづくり(市民主体のまちづくりを目指す)

(2) 社会的共有資本

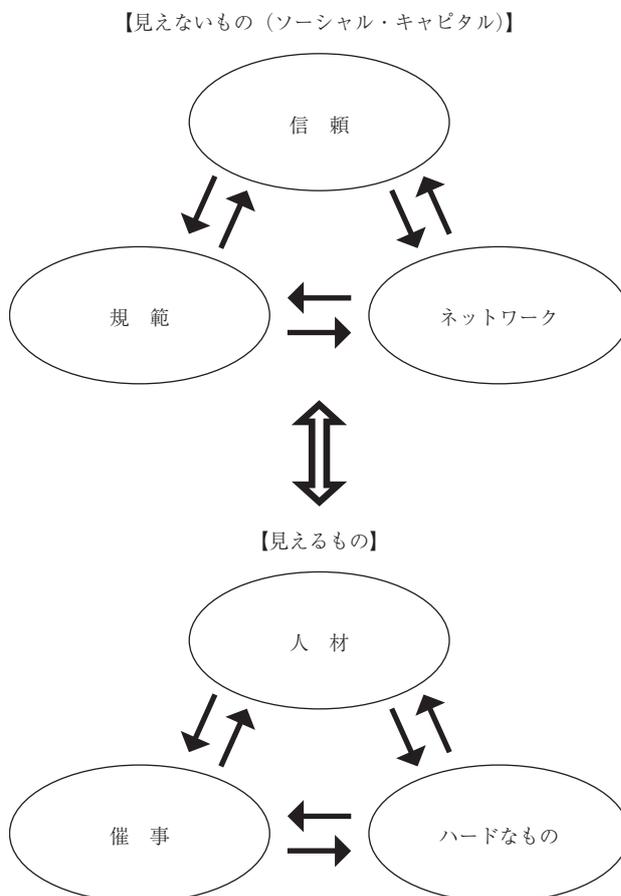
持続可能なまちづくりの基盤には、社会的共有資本が存在するものとして考えを進めていく。宇沢弘文¹⁾は、社会的共通資本の理論を展開した。社会的共通資本とは、「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、

安定的に維持することを可能にするような社会的装置」である。

ここでは、社会的共通資本という宇沢の理論を参考に、まちづくりに焦点を絞り、「社会を持続的に維持することを可能にし、地域に住む人々が共有する社会的装置」として、「社会的共有資本」を考察する。社会的共有資本とは、地域に住む人々が共有する社会的装置である。その構成要素は、まちづくりにおける「可視的なもの」と「不可視的なもの」という二つの範疇で考え、地域の人材・地域空間のハードなもの・催事などを「可視的なもの(見えるもの)」として、ソーシャル・キャピタル(「信頼」・「規範」・「ネットワーク」)を「不可視的なもの(見えないもの)」として捉えていく。

社会的共有資本とは、地域社会に存在する「①見えないもの(「信頼」・「規範」・「ネットワーク」=ソーシャル・キャピタル)、②見えるもの(地域の人材、ハードなもの、催事)の両者により構成され、地域を維持する力として捉える。

図1 社会共有資本の関係図



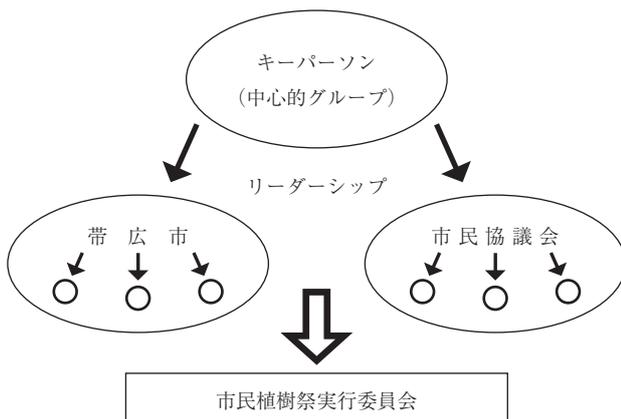
2. 帯広の森における初動期のまちづくり

(1) 初動期のまちづくりのしくみ

近代的田園都市構想という行政主導で始まった帯広の森づくりは、市民運動と連携を保ちながら進展してきたという特徴を有している。帯広の森の初動期のまちづくりは、複数のキーパーソンを主体として、キーパーソンがリーダーシップを発揮し、まちづくりに取り組む人々の間で目標像の共有（帯広の森づくり）を図り、その成果が市民植樹祭に結実したといえることができる。

初動期のまちづくりにおいては、まちづくりに関心を持つ人々が集い、イベントやワークショップの開催を通して課題を共有していく。その取り組みの中からキーパーソンが誕生し、キーパーソンが賛同者を募り、賛同者が周囲の住民をまちづくりに巻き込み、まちづくりは広範な理解を獲得していくのである。この時期のまちづくりのしくみは、キーパーソンのリーダーシップが重要である。

図2 初動期のまちづくりのしくみ



(2) ソーシャル・キャピタル

初動期のまちづくりにおけるソーシャル・キャピタルを、①信頼、②規範、③ネットワークという要因で分析する。

- ①信頼：相互の信頼関係は精神的な安心感を醸成し、自発的な協力関係が促進される³⁾
- ②規範：共感にもとづくボランティアな行動を誘発する³⁾
- ③ネットワーク：人と人がつながるといだけではなく、つながりが自ずと社会性や公共性の意識を生み出す苗床となる³⁾

①信頼：初動期の信頼関係は、行政と市民のキーパーソンのボランティアな協力関係の促進により形成された。キーパーソンの信頼関係が、初動期のまちづくりを主導し、賛同者の広がりを可能としたのである。その広がりが、市民運動の興隆を生んでいった。

②規範：信頼関係を礎として、市民運動の興隆を背

景に模擬議会や中央公園シンポジウムが開催され、課題の共有化に大きな効果を上げ、市民の間に帯広の森づくりへの共感が形成された。

③ネットワーク：帯広の森づくりへの共感が広がるにつれて、市民（団体）の繋がりも深まり、帯広の森市民協議会が結成された。

表1 初動期のソーシャル・キャピタル

	ソーシャル・キャピタル		
	信頼	規範	ネットワーク
帯広の森づくり	行政と市民のキーパーソン	模擬議会と中央公園シンポ	帯広の森市民協議会

3. 帯広の森における実践期・発展期（初期）のまちづくり

(1) 実践期のまちづくり

初動期の植樹活動が成果を上げると、育樹という問題が浮上した。1990年から初夏に植樹祭、秋に育樹祭が開催され、森づくりは活況を呈した。実践期のまちづくりは、植樹祭・育樹祭実行委員会を主体として、市民（団体）の交流・支援のネットワークが広がり、多様な市民の参加が促進された。2004年に植樹祭、2005年に育樹祭が終了し、帯広の森づくりは新たな段階を迎えた。実践期は「植樹」に「育樹」が加わり、行政・市民の協働が深まっていく時期である。

(2) 発展期（初期）のまちづくり

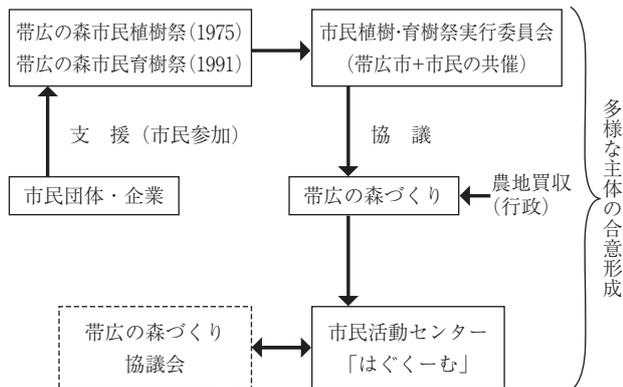
帯広の森づくりは植樹祭・育樹祭が終了し、市民主体の森づくりが模索された。2010年には、帯広の森の育成管理・利活用の拠点として、「はぐくむ」が建設された。帯広の森の情報センター、学習活動などの拠点として、その役割は今後さらに発展することが期待できる。帯広の森における発展期のまちづくりは、市民主体の森づくりである。帯広の森づくりは、発展期の初期段階に到達したものと考えられる。

(3) まちづくりのしくみ

実践期のまちづくりは、異種・異質の組織が、共通の社会的目的（まちづくり）のために協働する時期である。発展期（初期）のまちづくりは、そのプロセスで市民活動センターを模索し、「はぐくむ」が誕生した。その取り組みが、市民主体の発展期（初期）のまちづくりの端緒を切り開いたものと考えられる。

帯広の森における実践期のまちづくりのしくみは、帯広市と市民植樹祭・育樹祭実行委員会を中心に市民が森づくりに参加する「協働型まちづくり」である。発展期（初期）のまちづくりのしくみは、「はぐくむ」が、「帯広の森づくり協議会」の支援を受けながら「市民主体のまちづくり」への移行に大きな役割を果たしていくものとする。

図3 実践期・発展期（初期）のまちづくりのしくみ



(4) ソーシャル・キャピタル

実践期・発展期（初期）のまちづくりにおいて、ソーシャル・キャピタルが初動期と比較して大きく変容している。

- ①信頼：キーパーソンから行政と市民の協働関係へと変化
- ②規範：植樹・育樹活動に対する自発的な市民活動の深化と連携
- ③ネットワーク：森づくり市民団体の広がり（行政の支援）

実践期・発展期（初期）のソーシャル・キャピタルは、初動期の萌芽的な取り組みの蓄積からその厚みを増して、まちづくり活動に寄与している。

表3 実践期・発展期（初期）のソーシャル・キャピタル

	ソーシャル・キャピタル		
	信頼	規範	ネットワーク
帯広の森づくり	行政と市民の協働 ↓ 市民主体の森づくりへ	植樹・育樹の市民活動	市民団体の森づくり活動

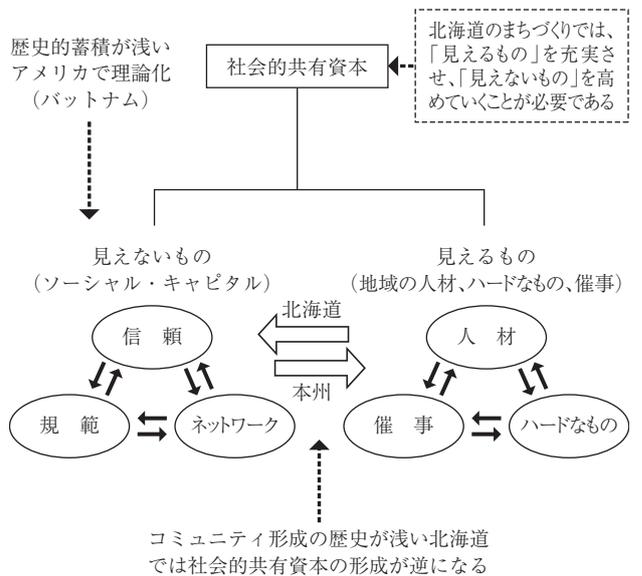
4. 社会的共有資本の比較（本州と北海道）

本州と北海道の社会的共有資本を比較すると、社会的共有資本の形成プロセスが正反対である。コミュニティ形成の歴史が浅い北海道では、「見えるもの」を基盤として「見えないもの」の関係性を豊かにす

ることが重要である。コミュニティが歴史的に形成されてきた本州では、「見えないもの」を基盤として「見えるもの」が形成される。そのことは、ソーシャル・キャピタルが基底部分に存在する社会と、ソーシャル・キャピタルを新たな形成することなしにはまちづくりが構築できない社会の相違である。いずれにせよ、まちづくりの基盤には社会的共有資本が存在し、豊かな社会的共有資本を蓄積することが持続可能なまちづくりには不可欠な要因である。

社会的共有資本の中では、①相互の信頼関係、②共感に基づくボランティアな行動、③人と人が繋がるネットワークにより構成されるソーシャル・キャピタルが、まちづくりの基盤として重要である。今後の帯広の森づくりでは、人と人との豊穡な関係性の更なる構築が、ソーシャル・キャピタルの厚みを生み出していくものとする。

図4 社会的共有資本の比較



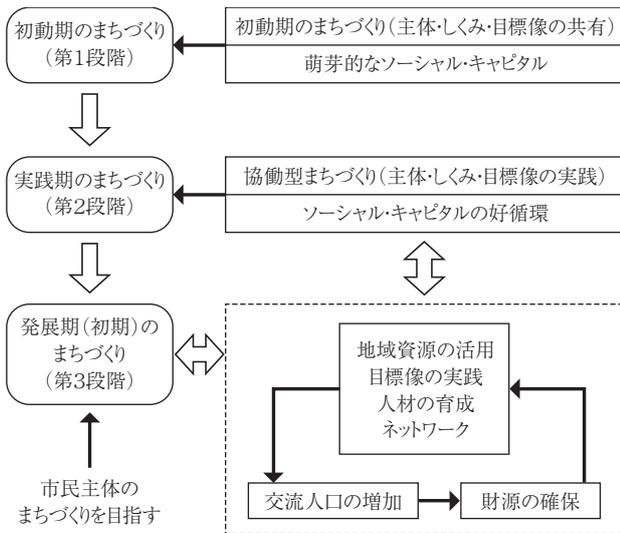
5. 帯広の森におけるまちづくり活動の意義と評価

(1) まちづくり活動の意義

初動期・実践期・発展期（初期）におけるソーシャル・キャピタルの①信頼、②規範、③ネットワークという要因の分析を通して、ソーシャル・キャピタルの蓄積が、まちづくり活動を牽引していることが分かる。初動期の萌芽的なソーシャル・キャピタルの蓄積が、実践期・発展期（初期）のソーシャル・キャピタルの好循環を生み出す要因である。その点において、まちづくり活動の基盤を成すソーシャル・キャピタルの蓄積は評価に値するものである。帯広の森のまちづくり活動が、社会的共有資本の豊穡な関係性を蓄積してきたことは、大きな意義を有している

ものと考える。

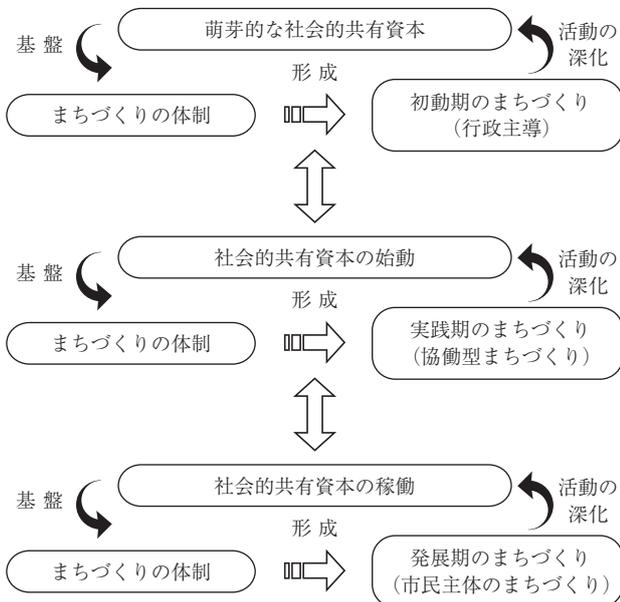
図5 まちづくり活動とソーシャルキャピタル



(2) まちづくり活動の評価

初動期・実践期・発展期の社会的共有資本（「見えるもの」・「見えないもの」と「まちづくり活動の主体・しくみ・目標像」は、密接な連関を保っている。

図6 まちづくり活動の循環



社会的共有資本の変化が、主体・しくみ・目標像の変化を促し、まちづくりの体制を形成しているのである。帯広の森のまちづくり活動において、評価できることは行政・市民の継続的な活動である。まちづくり活動の循環は、好循環ばかりではなく、活動が停滞し元に戻るという可能性も有している。帯広の森のまちづくり活動は、様々な課題を乗り越え、

継続的な活動に取り組んでいる。そのことが、評価に値するのである。

6. 今後の展望

初動期・実践期・発展期（初期）の持続可能なまちづくりプロセスは、循環しながら螺旋的に変容していく。今後の動向については、発展期の将来的な展望として成熟期を考えて見たい。

成熟期のまちづくりは、「安定した地域社会の運営システムを構築」²⁾ することである。成熟期のまちは、「外にアピールする活動は必要が無く、良好な住宅地などでは地域運営活動を中心に、住環境を守るためのまちづくり協定や地区計画等をもとにして、個々の活動団体がそれぞれの使命を果たし、それが全体として運営されることで事足りてくる」²⁾ のである。現時点において、成熟期に到達しているまちづくりは、少数である。成熟期のまちをデザインしてみたい。

- ①主体→協働
- ②しくみ→安定した地域社会の運営システム
- ③目標像の実践→成熟のマネジメント（定常状態を維持）
- ④社会的共有資本

「見えるもの」→信頼+規範+ネットワーク
 「見えないもの」→地域の人材+ハードなもの+まちづくり活動

この段階に到達すれば、持続的なまちの運営を維持すると同時に、「『成熟という名の停滞』ではない、活力ある地域社会」²⁾ が形成される。協働による運営システムの基盤に、社会的共有資本が好循環して支え、活力ある地域社会の形成に寄与している。

発展期に移行する段階のまちづくりが成熟期に到達するには、まちづくりをさらに深化させれば良いというわけではない。そこに渡るには、深淵が横たわっている。その深淵を跳躍できるのは、地域力に他ならない。その地域力を基盤で支えるのは、社会的共有資本である。豊かな社会的共有資本は、まちの成熟に寄与することができるのである。

十勝の大地に根付いた「郷土の森」の新たな創造を目指す100年の森づくりは、北海道のようにスケールの大きな夢なのである。

引用・参考文献

1) 宇沢弘文：『社会的共通資本』、p.ii、岩波書店、2000
 2) 佐藤滋：「まちづくりのプロセスをデザインする」『まちづくりの方法』日本建築学会編、第1巻、p.57、丸善、2004